衝撃波で狭心症治療

東北大病院 下川教授 今月から臨床試験

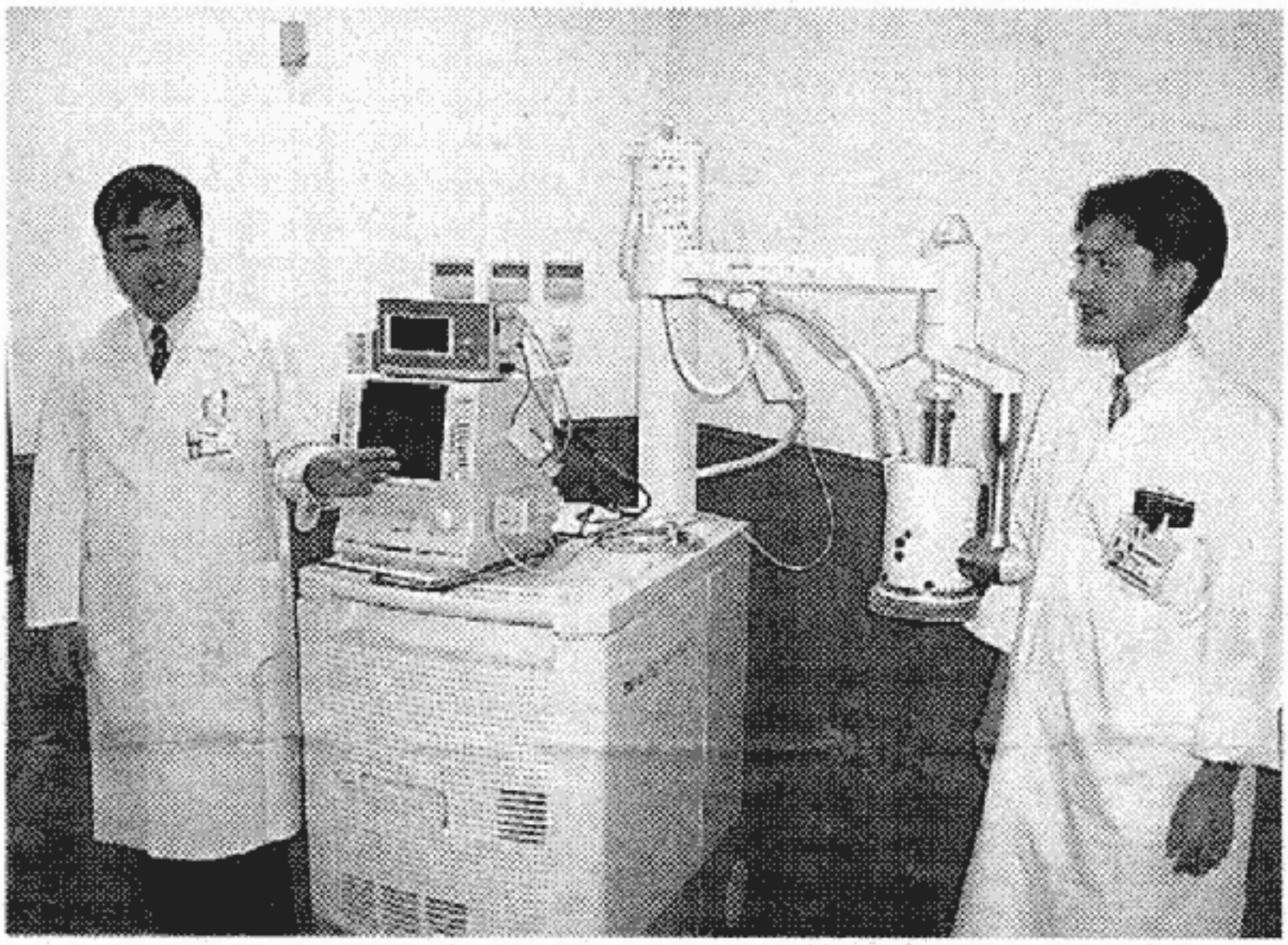
東北大病院は4日、体外衝撃波で心臓の血管を新たにつくるのを促し、手術などが難しい重度の狭心症患者を治療する臨床試験を、今月から始めると発表した。担当の同大大学院の下川宏明教授によると、この治療法は前任の九大時代に開発したもので、同大では患者10人を治療したという。

下川教授らは、結石を砕く治療に使われる体外衝撃波を10分の1程度の出力にしぼって血管にあてることで、血管をつくり出すのを促す物質を増やすことに成功。豚で有効性を検証し、03～04年にかけ、九大病院で10人の患者に第一次の臨床試験を実施した。ほぼ全員で胸の痛みの症状が改善した。このうち6人の患者の歩行データをとったところ、治療前は6分間で平均340㍍しか歩くことができなかったのが、治療後には平均430㍍まで歩けるようになったという。

ただ、がん患者は、がんを進行させる可能性があり、シリコンを入れる豊胸手術をした人などは、衝撃波が心臓に到達しないおそれがあるため治療対象にならない。

東北大病院では、今後2年間で40人程度の患者に対しての臨床試験を予定している。

下川教授は、「ほかに治療法がない重い患者さんから始めるが、徐々に治療対象を広げていきたい」と話している。



衝撃波治療装置の説明をする下川宏明教授（左）＝仙台市の東北大病院で

2005年11月5日
朝日新聞 朝刊